英語を学ぶすべての人のための英文法 (English Grammar For All Learners)

【学習書のレベル選定】

理由や背景は人それぞれだと思いますが、社会人になってから英語を学び直そうと考えている人が増えています。高校時代に英語が得意だった人もいれば、苦手だった人もいるでしょう。そのため、自分のレベルに合った教材を選ぶことが大切です。

最近では、さまざまなレベルに対応した英語教材が出ていますが、特に初級者向けの「中学英語のやり直し」シリーズをよく見かけます。その中には、社会人向けでありながら、子供でも使えるような教材もあります。英語に苦手意識がある人は、まずこのレベルの本から始めて、一通り終わった後に次のステップに進むのもひとつの方法です。一方、すでにある程度の英語力がある人は、自分のレベルに合った本を探し、「これなら続けられそう」と思えるものを選ぶことが重要です。そこで、ひとつ気をつけたいのは、冠詞や名詞の使い方など基本的な文法がしっかり扱われている教材を選ぶことです。この点については、後ほど詳しく説明します。

【易しいものから徐々に難易度を上げていく学習法】

本書の最大の特長は、ゼロから英語を学ぶ初心者から、英検１級レベルの上級者まで、幅広い層をターゲットにしている点です。そのため、内容が非常に豊富で、特に初心者の方には「難しそう」と感じる部分もあるかもしれません。でも、ご安心ください。本書では、各項目の解説部分に「難度1」「難度2」「難度3」といった表示があります。表示がない部分は初級レベル、「難度1」は中級レベル、「難度2」は上級レベル、「難度3」は超上級レベルとなっています。初級レベルの方は、まず表示がない部分を一通り読み、次に各章の練習問題を解き、その後に中級レベル→上級レベル→超上級レベルと進んでいく形で学習を進めることができます。

【基礎学習の重要性】

一般的に、本書のような分厚い英文法書を読む際、中級以上のレベルの人は、初級レベルの部分を飛ばして進めがちです。なぜなら、「今さら初級の解説を見ても、得られるものはない」と思ってしまっているからです。しかし、実際には、自分では理解しているつもりでも、意外としっかり理解できていないことがよくあります。筆者自身も、英語が得意だった高校時代には、基礎は完璧に理解していると思い込んでいました。その後、大学で英語を専攻し、高校で英語を教えるようになってからも、基礎の重要性を十分に実感せず、深く掘り下げて学ぶことはありませんでした。

ところが、浦和高校に赴任して間もなく、ある出版社から文部科学省検定の『ライティング』教科書の執筆を依頼され、教師用指導書を一人で担当することになりました。全国の英語教

師を対象にした教科書だったので、いい加減なことは書けないと強く感じ、膨大な時間をかけて、原書の文法書や語法の専門書を徹底的に読み込みました。その結果、ようやく納得のいく指導書を完成させることができました。弱小出版社からの発行にもかかわらず、この指導書は特に高く評価され、全国の高校で多く採用されました。そして、その後も教育課程の変更でライティングの科目が廃止されるまで、ベストセラーの教科書のひとつとなりました。

振り返ってみると、この学び直しを通じて、筆者は多くのことを学びました。それまで自分が持っていた知識がいかに浅かったか、思い込みから誤った理解をしていたことがどれほど多かったか、そして何よりも、自分が完璧だと思っていた基本的なことについて、さまざまな新しい発見があったことが、最も大きな収穫でした。

【わかっているつもりでもわかっていないこと】

中学校に入るとすぐに覚えさせられた人称代名詞の活用表があります。「アイ（**I**）・マイ（**my**）・ミー（**me**）・マイン（**mine**）」「ユー（**you**）・ユア（**your**）・ユー（**you**）・ユアーズ（**yours**）」と、ひたすら繰り返し覚えたものです。さて、ここで問題です。あなたが女子だけのパーティーで友達と会話をしているとします。そこに突然一人の男性が入ってきて、みんなの目線は自然とその男性に向けられます。「えっ、（彼）誰?」「彼のこと、知ってる?」と言いたい時、英語では何と言うでしょうか?

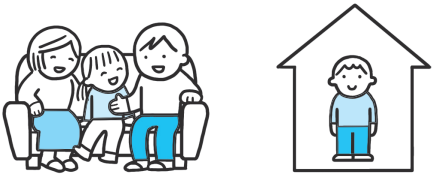
正解は、**Who is he?** や **Do you know him?** ではありません。三人称の人称代名詞は、すでに話題に上がっている人物を指すものなので、唐突に **he**（彼）や **she**（彼女）を使うことはできません。正しい表現は、**Who is that man?**（あの男性、誰?）や **Do you know that man?**（あの男性、知ってる?）です。そして、これらの文に対して **He's Mr. Smith.**（彼はスミス氏です）や **I know him.**（彼のこと、知ってます）と続けるのが基本的な使い方です。

相手から「明日、映画を見に行かない?（**Why don't we go to see a movie tomorrow?**）」と誘われて、「それはいいですね」と答える場合、英語では **That's great.** と返します。日本語の「それ」に引っ張られて、つい **It's great.** と言いたくなるかもしれませんが、相手の言葉や内容を受けて返答する場合には **it** ではなく、**that** を使うのが正しい表現です。

【コアイメージをつかんでネイティブ感覚を身に付ける】

英語を学び始めた頃、「**it** ＝それ」、「**that** ＝あれ」といった一語一訳で暗記した人は多いのではないでしょうか。正直なところ、筆者自身もそうでした。この覚え方は、初級者にとっては最も手っ取り早い方法だと思います。しかし、学習を進めるにつれて、その矛盾に気づきつつも、頭の中でしっかり整理せずにそのままにしてきた人が多いのではないでしょうか。実際、**it** は日本語に訳さないことも多いですし、**that** は「あれ」ではなく、「それ」と訳されることもよくあります。大切なのは、一語一訳で **it** や **that** を覚えるのではなく、それぞれの語が持つコアイメージをしっかりと捉えることです。

例えば「家」を表す **"house"** と **"home"** のコアイメージの違いを見てみましょう。簡単に言えば、**"house"** が「人が住む建物」に焦点があるのに対して、**"home"** は、「人々が暮らしを営む所」や「家族と共にくつろぐ所」に焦点があるという違いです。



本書のもう一つの特長は、コアイメージを掴むための「簡潔な解説」と、「イラスト」を豊富に盛り込んでいる点です。イラストを使ってイメージを視覚的に捉えることで、ネイティブスピーカーの赤ちゃんが自然に英語を覚える過程と同じ感覚で理解できるようになります。

【受験英語の文法と会話表現】

このように、初級レベルの英語でさえ正しく理解されていないことがあるわけですから、高校以降に学ぶ中級レベルの内容になければ、理解したつもりでも実際にはそうでないということは、多々あります。例えば、受験英語でもよく見かける文法項目に「強調構文」があります。では、次の英文の下線部を強調する形に書き換えてみましょう。

Meg broke **this vase.**　（メグがこの花びんを割った）
①　　②

正解は① **It was Meg that broke this vase.** と② **It was this vase that Meg broke.** で、それぞれ「この花びんを割ったのはメグでした」と「メグが割ったのはこの花びんでした」という意味になります。いわゆる「**It is ~ that …**」の強調構文で、強調したい語句を「～」の部分に入れて表す構文です。おそらく、多くの学習者はこの程度の理解にとどまっていることでしょう。しかし、これだけでは強調構文をしっかり理解したとは言えません。この構文を理解する上で重要なのは、実際の会話では強調構文はあまり使われないという点です。

①の **It was Meg that broke this vase.**（この花びんを割ったのはメグでした）という文は、すでに割れた花びんが話題になっていて、「割ったのは誰だろう。メアリーかな?それともルーシーかな?」という流れの中で、「実は、この花びんを割ったのは他でもない、メグだった」と伝えるためのものです。また、誰かが「犯人はメアリーだろう」と言った後に、「いや、犯人はメアリーじゃなくてメグだよ」という場面でも使われます。よって、このような場面では、より自然な形として **It was Meg, not Mary, that broke this vase.** や **It was not Mary but Meg that broke this vase.** のように表現されることが多いです。

【強調構文が意図するもの】

このように、強調構文には、誰かの思い込みや誤解を正したり、別のものと対比しながら、その一方を強調したいという意図が込められています。動詞を強調する際には、助動詞の **do** / **does** / **did** を使います。例えば、**Tom likes watching baseball.**（トムは野球を見るのが好きです）の **likes** を強調する場合、**Tom does like watching baseball.** となります。この文は、**Tom doesn't play baseball, but he does like watching it.**（トムは野球はしないけど、見るのは好きだよ）のように使うのが自然で、**play** することではなく、**like watching** することを強調するために使われていることを理解しておく必要があります。動詞を強調する助動詞の **do** の訳には「本当に」や「是非」などが当てられることが多いのですが、実際にはこのような訳が当てはまらないことが多いのです。

【最後に】

本書には、すでに理解しているつもりでも実はよく分かっていなかったことや、「あっ、そうだったのか！」と驚くような情報が豊富に盛り込まれています。そのため、最後まで飽きることなく読み進められる一冊だと自負しています。本書を通じて、読者の皆さんが多くの新しい発見をしていただけることを心から願っています。

- 「**break**」

  「**break**」では、解説した「文法用語」の語源や、その他の関連単語の語源情報を紹介しています。文法だけでなく語彙力を高めたい人にも役立つ内容ですので、ぜひご覧ください。なお、ターゲットは中級者以上を想定しているため、初級者は「これは面白そう」と思ったものだけをピックアップして読むのもいいでしょう。

- 「深掘り解説」

  この「深掘り解説」では、「3 単現」の **s** や複数形の **s** がどこから来たのか、冠詞の **a** / **an** / **the** の語源はなにか、受動態と完了形になぜ過去分詞を使うのか、そもそも「分詞」とは何か、といった筆者自身が抱いていた素朴な疑問に対し、英語の歴史的な観点から解説しています。これらの内容は、英語の歴史に興味のある人や、上級者レベルの学習者を対象にしており、特に英語を教えている立場にある人にとって有益な情報が満載されています。

以下、本書（特に深掘り解説や **break**）を読み進める上で、最小限必要な用語を解説します。

- 印欧祖語：「インド・ヨーロッパ語族」は、現在のインド周辺からヨーロッパにかけて広がる地域で話されている言語グループで、これらの言語はもともと「インド・ヨーロッパ祖語（以下、印欧祖語）」と呼ばれる共通の言語から枝分かれして生まれたと考えられています。つまり、印欧祖語という一つの言語が、地域や民族ごとに分岐し、英語、ドイツ語、スウェーデン語、フランス語、ロシア語、ペルシャ語、ヒンディー語などが派生したとする理論です。印欧祖語の起源については諸説ありますが、紀元前 4000 年頃、現在のウクライナからロシア南部のステップ地帯、黒海周辺からカスピ海北方にかけてあったとする説が有力です。

ただし、文字が存在しなかった時代のことなので、これはあくまで仮説に基づいた理論です。印欧祖語は数え方によって異なりますが、11 前後の語派に分けられ、英語はドイツ語、オランダ語、デンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語、アイスランド語などと共に、ゲルマン語派に分類されます。一方、古代ローマ人の言語であったラテン語から枝分かれしたフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語などはイタリック語派に分類されます。これらは古代ローマ人の言語であったことに因んで「ロマンス語(**Romance languages**)」と呼ばれます。

- グリムの法則：印欧祖語の子音が、ドイツ語や英語などのゲルマン諸語に変化する際に、規則的に他の子音に変わることを示す法則です。たとえば、印欧祖語からゲルマン諸語への音の変化には、**p** → **f**、**b** → **p**、**d** → **t**、**g** → **k** などがあります。このうち、一つ例を上げましょう。印欧祖語で、「父」を表す語は **pəter-** で、おそらく「パテール」と発音されていたと推定されます。これは古代インドの言語であったサンスクリット語では **pitar-**、ギリシャ語やラテン語では **pater**、古アイルランド語では **athir**、そして英語では **father** になります。つまり、印欧祖語の **p** の子音で始まる **pəter** は、ゲルマン語派の英語では **f** で始まる **father** になっています。「足」を意味する印欧祖語の **ped-** もゲルマン祖語の **fōts** から古英語の **fot** を経て、現代英語の **foot** になっています。これについては本書の深掘り解説で詳しく解説しています。
  この法則を体系化したのが、ドイツの言語学者ヤーコプ・グリム(**Jacob Grimm**)であり、その名前にちなんで「グリムの法則」と呼ばれています。ちなみに、彼は『グリム童話集』を編纂したことで知られるグリム兄弟の兄です。

- 古英語(450 ～ 1100)：古英語(**Old English**)は、いわゆる『ゲルマン人の大移動』の一環として、5 世紀中頃からアングル人(**Angles**)やサクソン人(**Saxons**)など、低地ドイツ語方言を話す人々が北海を越えてブリテン島に侵入し、先住民であるケルト人を追い払ったことから始まります。**English**(英語)はアングル人の話す言語、**England**(イングランド)はアングル人の土地に由来する語です。その後、8 世紀末から 11 世紀にかけて、北欧ヴァイキングの一派であるデーン人による侵攻があり、一部はイングランド北東部に定住したため、英語は彼らの話す古ノルド語の影響を大きく受けることになります。古ノルド語については深掘り解説を参照してください。

- 中英語(1100 ～ 1500)：中英語(**Middle English**)は、いわゆる 1066 年の『ノルマン・コンクエスト』以降の英語を指す語です。この征服によって、支配層の言語であったフランス語と、一般庶民が話していた英語が混ざり合ったのです。ノルマン人はフランス語を話していましたが、もともとは北欧ヴァイキングを祖先とする民族で、北欧訛りのフランス語でした。この時期、英語はフランス語やその祖語であるラテン語の影響を強く受け、語彙や文法が大きく変化しました。

- 近代英語(1500 ～ 1900)：近代英語(**Modern English**)は、1500 年頃から 1700 年頃までの「初期近代英語」と、1700 年頃から 1900 年頃までの「後期近代英語」に大きく分けられます。1900 年以降は、現代英語と呼ばれています。初期近代英語の時代に、現代英語の原型が形成されたとされています。